

# 埼玉県西部地域における伝統的方言の分布調査の経過報告 —「秩父方言」の広がりと境界—

亀田 裕見  
(文教大学文学部)

## 1. 研究目的

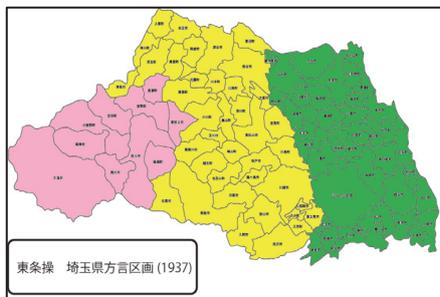
本研究では、文教大学文学部日本語日本文学科の学生と2006年以来共同調査を続けている成果の途中報告である。この調査では、埼玉県西端の秩父市や小鹿野町から始まり、徐々に東方に向けて調査地域を拡大している。主に埼玉県の西部と東部の境界がどのあたりにあるのかを、言語地図を作ることで明らかにし、また、既に亀田(2010a)・亀田(2010b)で報告した県東部とどのように連続しているのかを明らかにすることを目的としている。

現在の埼玉県方言がおかれている状況は方言の維持・残存という面からするとなかなか厳しい状況ではある。埼玉県の中の東京都に近い地域や、人口の多い都市部では、当然のごとく共通語化が進行している。それは亀田(前掲)によって東部で世代差を見たことから明らかである。この論文のデータ提供者は、高年層(2012年時点平均81歳に相当)、中年層(2012年時点平均52歳に相当)であったが、東京都に接しているJR武蔵野線以南から速く共通語化が進行していた。それに加え「埼玉都民」ということばがあるほど、埼玉県は東京都に通勤通学する人が多い。それを考えると埼玉県の伝統的方言の様相を知るには今が最後の時期であろう。2008年以降筆者が行っている埼玉県東部の越谷市で方言残存状態の調査の結果では2012年時点50歳代から急速に伝統的方言が消失している。

このような状況のなか、埼玉県東部の高年層を対象にした調査の経過報告をし、埼玉県で「秩父方言」と呼ばれる西部方言の広がりや境界線について改めて考えたい。

## 2. 先行研究

埼玉県の方言区画を示したものは、まず東条(1937)による東中西の3分割区画が挙げられる。この記述を元に地図にしたものが図1である。東条は以下の様に、郡単位で分けたおおざっぱなものである。



東部(北葛飾郡・北埼玉郡・南埼玉郡・北足立郡)  
中部(大里郡・児玉郡・比企郡・入間郡)  
西部(秩父郡)

図 1

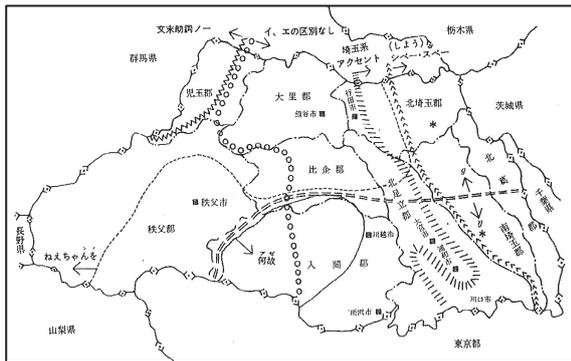


図 2 井上 (1984) より

次に井上(1984)では図2を示し、「サツマイモの形をした埼玉県が、タテの線で東と西に二分(または三分)されることに加え、また南北に分かれる傾向」があると述べている。

これらのように、埼玉県は少なくとも東部・中部・西部の区画に分かれ、南北の違いもありそうである。亀田(前掲)でも、埼玉県東部はおおよそ春日部市付近を境に南北に分かれることを指摘している。



図 3

埼玉県内の方言分布に関する先行研究は国立国語研究所の『日本言語地図』(以下『LAJ』)や『方言文法全国地図』(以下『GAJ』)、また大橋(1990・1991)の『関東地方域方言事象分布図』のような大規模調査の一部として存在する。もう少し規模の小さな調査では九学会連合の利根川流域調査に埼玉県の一部が入っている。

埼玉県内の言語地理学的調査は東京外国語大学日本語ゼミナール(1978)『秩父地方方言地図』、鶴田秀樹(1986)『埼玉県秩父地方における言語地

理学的研究』、柴田武(1984)「埼玉県南部・東京都北部の方言分布(1)」,そして亀田(前掲)がある。図3はこれらの調査地点を重ね合わせたものである。

これらの研究ではいわゆる「秩父方言」というべき埼玉西部とそれ以外の領域の境界はまだまだはっきりしていない。

### 3. 調査概要

調査は最西端の秩父郡から順次東へ調査地域を拡大している。2006~2011年の調査地点は22市町村の64地点である。調査領域が図4のように秩父郡からさらに東まで(なお、その後も調査

を続け、2013年次点では85地点にまで増えているが、本報告では2011年までのデータを元にする)インフォーマントの平均生年は1935(昭和10)年(2011年時点で平均78歳)の生え抜き男性(外住歴の平均は1.5年)である。

調査内容は語彙項目38項目、文法項目47項目、アクセント項目60語+ミニマルペア5組である。比較対照する先行地図の相当地域における調査は、『LAJ』で12地点(東秩父村無し)、『GAJ』で5地

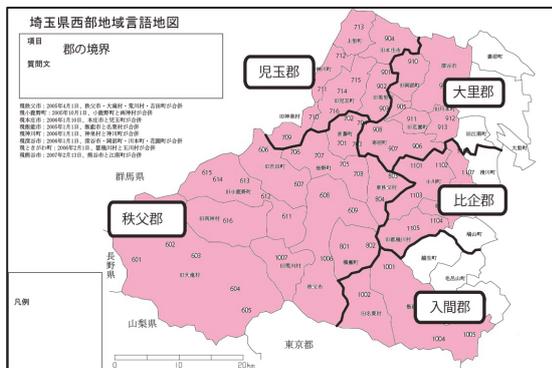


図 4 本稿の調査領域と郡の境界

点(東秩父村無し)、関東地方域』で12地点(東秩父村無し)であり、本研究の調査地点はこれらより密である。『LAJ』『GAJ』を見ていると、埼玉県は西部のいわゆる「秩父地方」と呼ばれるところに、埼玉県のその他の部分と異なる語形の分布があることがいくつか確認される。しかし、調査の目が粗いので、およそのところまでしか分からない。

『東京外語大秩父地方方言地図』と重なる地点は119地点で、こちらの密度には及ばないが、この研究は秩父郡のみになっており、秩父郡の中の調査は非常にきめ細かいが、秩父郡とその周辺地域との境界を見ることはできない。次章から、埼玉西部方言の境界について具体的な例を挙げながら考察する。

#### 4. 地図例の紹介－3点に注目して－

##### 4. 1 東秩父村の位置づけ

まず、行政的な土地区画としては秩父郡に属する「東秩父村」の位置づけについて取り上げる。東秩父村は本稿では、より山奥地(秩父市)寄りの「白石」と、秩父山地から平野につながる川沿いの「奥沢」の2地点で調査している。この2地点で回答が異なる語と、同じ語がある場合がある。異なる場合は白石のほうが秩父の語形、奥沢が東側の比企郡や大里郡と共通する語形を示す。同じ場合は、秩父郡の語形ではなく、東側と共通する語形を持つ。表1に例をまとめる。

表1	その他の秩父郡	東秩父村(白石)	東秩父村(奥沢)	比企郡大里郡
ものもらい	メカゴ	メカゴ・メッパ	メッパ	メッパ
蛙	ベッター	カエル	カエル	ゲーロ
うすい	ウスイ	アマイ	アマイ	アマイ・アマジオダ
あぐらをかく	ブチカル	アグロ	アグロオカク	アグロオカク
くるぶし	クルミ	クロボシ	クロボシ	クルミ
雷	カミナリ	ライサマ	カミナリ	ライサマ
とうもろこし	モロコシ	モロコシ・トンモロコシ	トウモロコシ	トンモロコシ
かぼちゃ	トーナス・トーガン	トーナス	トーナス	トーナス
つむじ	マキメ	マキメ	ツモジ	ツモジ
竹馬	タカアシ	タカアシ	タケウマ	タケウマ・タケンマ
まな板	キリバン	キリバン	マナイタ	マナイタ

す。同じ場合は、秩父郡の語形ではなく、東側と共通する語形を持つ。表1に例をまとめる。

また、具体的な地図を図5～12に、埼玉県付近の『LAJ』からの引用図と比較しながら示す<sup>1</sup>。

(図注の直線は東秩父村とそれ以外の秩父郡を分ける)『LAJ』とほぼ分布は同じだが本稿の地図では境界がよりはっきり見ることができる。

東秩父村の地形を見てみると、谷川(県道11号線)沿いに集落が発達し、この谷川沿いの道が比企郡・大里郡方面の平野部にむかってつながっている

ことと関係があるのであろう。東秩父村は秩父市方面とは、大霧山・堂平山・丸山の山麓地帯で区切られ、言語は定峰峠を越えて秩父側と結ぶよりは、むしろ東側の平野部からの影響が多いとして、「秩父方言(埼玉西部方言)」区画に属さない、と考える。

<sup>1</sup> 以下、本文中で『LAJ』『GAJ』から引用している部分図は国立国語研究所のサイト [http://db3.ninjal.ac.jp/publication\\_db/list.php?cat=ninjal19](http://db3.ninjal.ac.jp/publication_db/list.php?cat=ninjal19) および [http://db3.ninjal.ac.jp/publication\\_db/list.php?cat=ninjal35](http://db3.ninjal.ac.jp/publication_db/list.php?cat=ninjal35) から複写させていただいた。

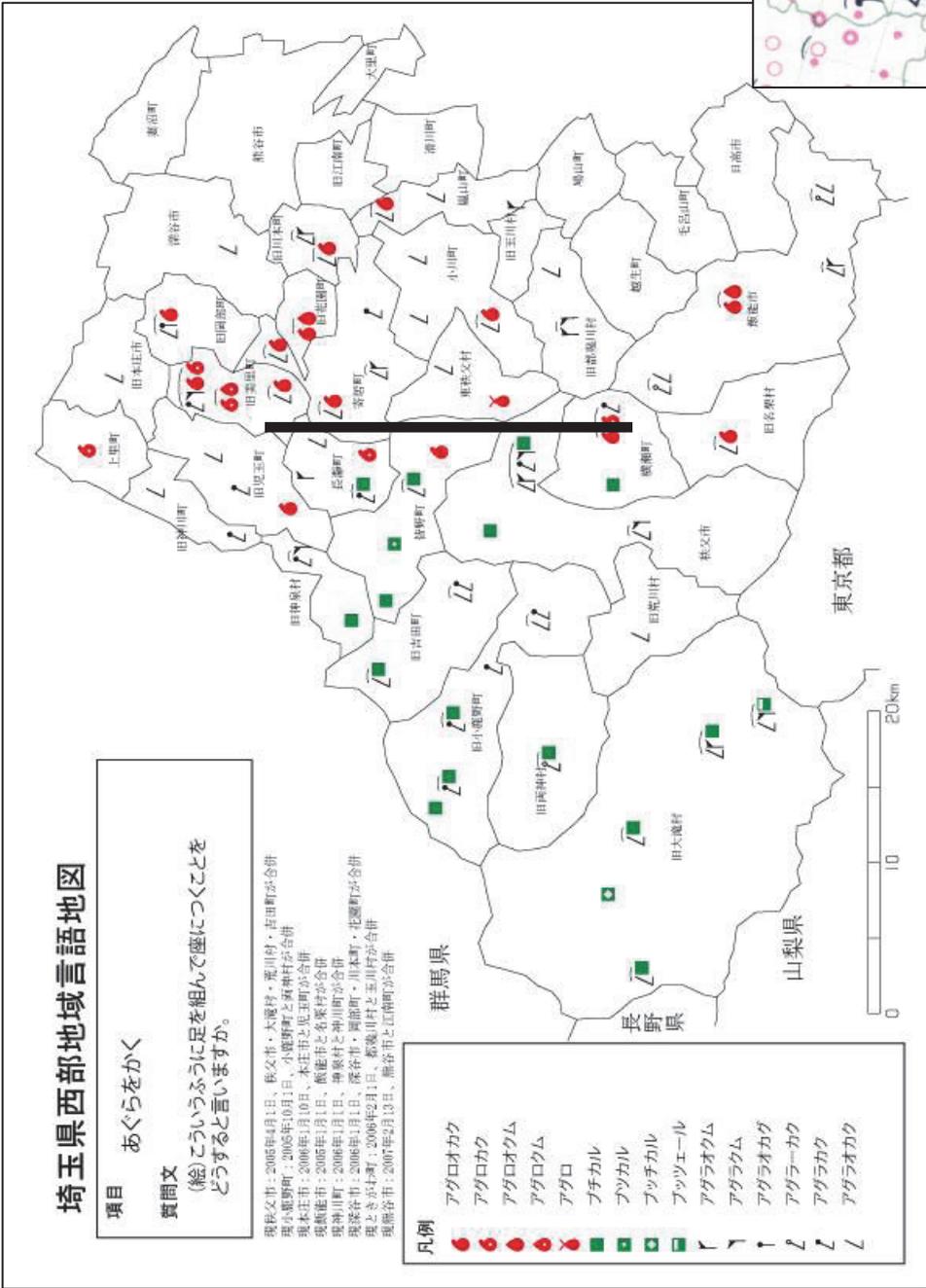


図5 「あぐらをかく」

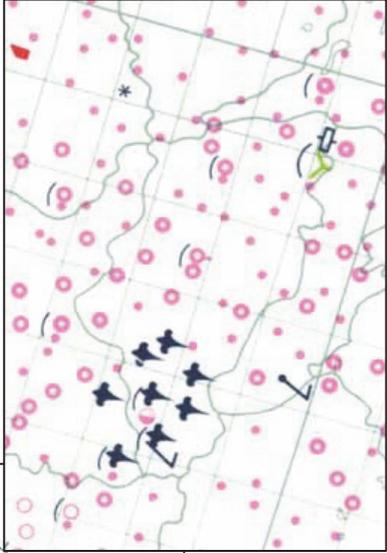


図6 LAJ 52図より「あぐらをかく」

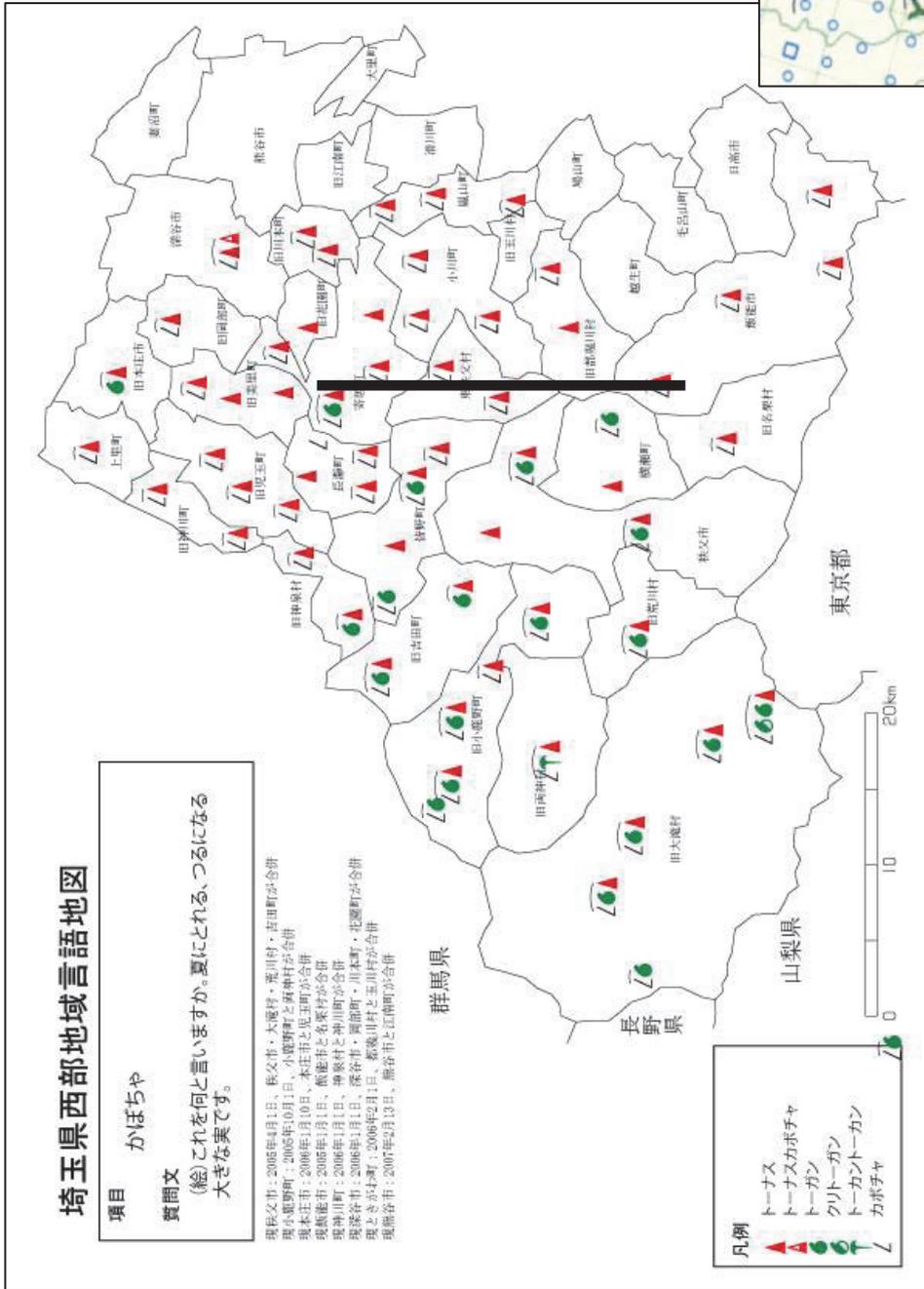


図 7 「かぼちゃ」

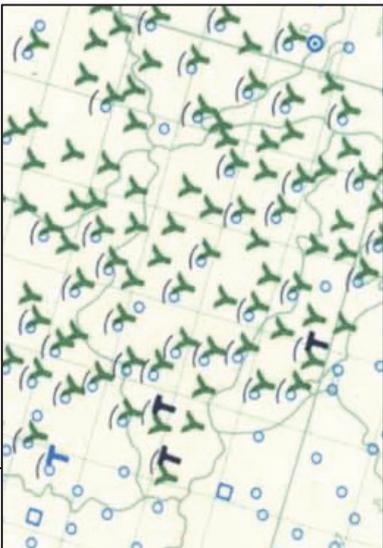


図 8 LAJ 180 図より「かぼちゃ」

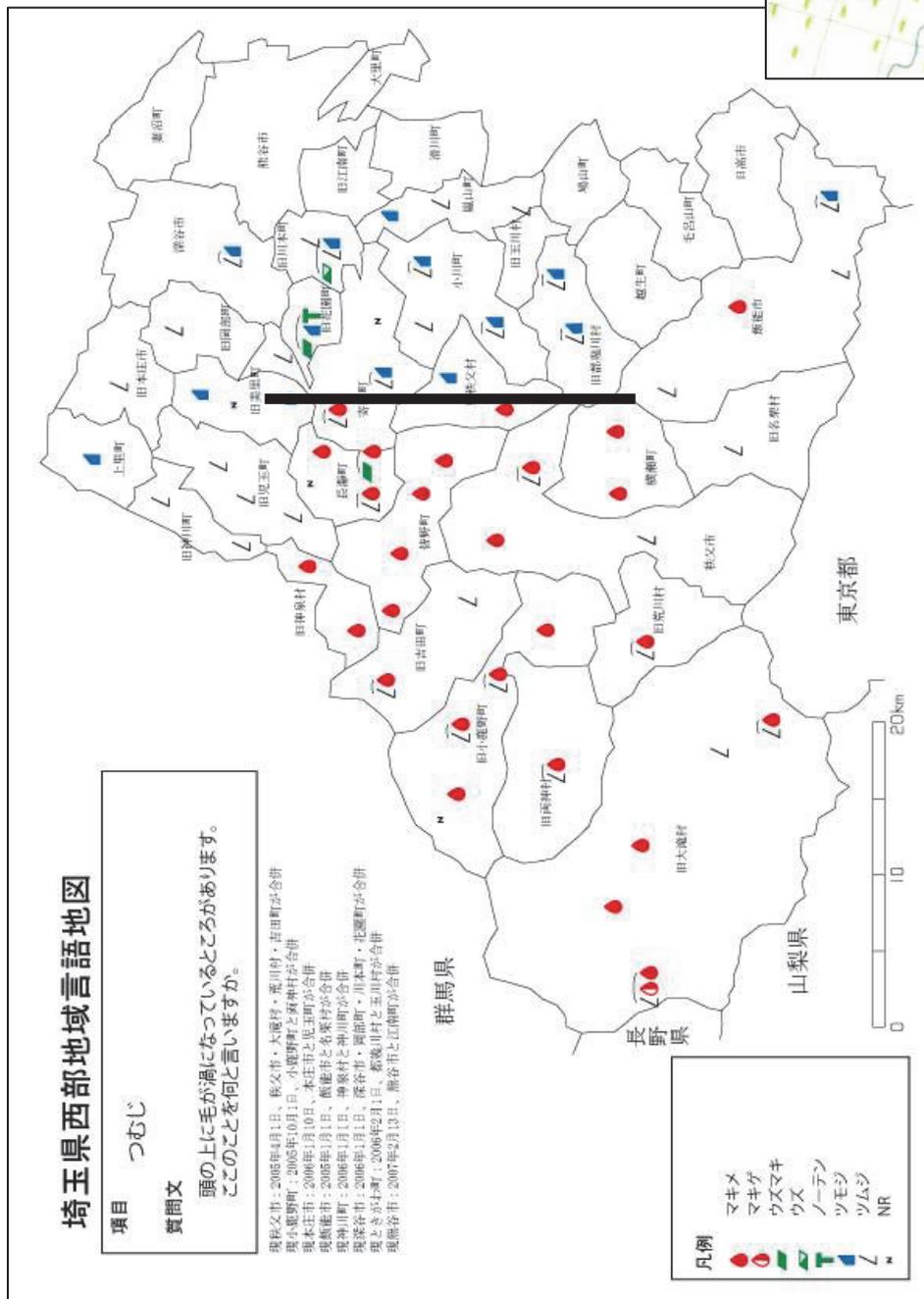


図 9 「つむじ」

図 10 LAJ 102 図より 「つむじ」



#### 4. 2 児玉郡の位置づけ

続いて、児玉郡の位置づけについて取り上げる。秩父郡の北部に位置し、群馬県と接している児玉郡は、「秩父方言」(埼玉西部方言)とどのような関係にあるか。言語地図を作図してみると、

表 2	その他の秩父郡	児玉郡旧神泉村	児玉郡その他	児玉郡美里町・比企郡・大里郡
ものもらい	メカゴ	メカゴ	メカゴ	メッパ
眉毛	マユ	マユ	マユ	マミヤ
稲妻	イナビカリ	イナビカリ	イナビカリ	オヒカリ
うすい	ウスイ	ウスイ ミズッポイ	ウスイ ミズッポイ	アマイ
雷	カミナリ	カミナリ	カミナリ	ライサマ
とうもろこし	モロコシ	モロコシ	モロコシ	トンモロコシ
蛙	ベッター	ベッター ゲーロ	ゲーロ	ゲーロ
あぐらをかく	ブチカル	ブチカル	アグロオカク	アグロオカク
まな板	キリバン	キリバン	マナイタ	マナイタ
もり	モリキ	モリキ・モリ	モリ	モリ

児玉郡の中でも、旧神泉村とその他の児玉郡の地域に分けられる。旧神泉村はほぼ「秩父方言」(埼玉西部方言)に属するが、その他の地域は語によって、属す語と、そうでない語とに分かれる。表2にまとめる。また、具体的な地図を図13～21に、埼玉県付近の『LAJ』からの引用図と比較しながら示す。「ものもらい」「稲妻」などは、秩父郡から児玉郡まで同じ語形が分布し、「西部方言」の境界

が児玉郡と比企郡および大里郡の間に境界が引かれる。「とうもろこし」や「蛙」、「あぐらをかく」などは旧神泉村を除いて児玉郡の語形は秩父郡の語形と袂を分かたず。つまり、旧神泉村は、現在旧神川村と合併して神川町となっているが、この現神川町は、言語上は内部に方言境界を持っていることになる。地形的に見ても、旧神泉村の地域は神流湖の南岸沿いとそこから流れる神川に沿って発達した集落であり、山地がほとんどを占める。旧神川村はその神川のさらに下流に位置し、平野部も多い。前節の東秩父村の位置づけについても言えることだが、地形が大きく言語境界を形成する要因となっているとみられる。また、その一方で、その他の児玉郡までが秩父方言から連続する語形の中に組み込まれている語もある。「稲妻」は「オヒカリ(サマ)」という平野部の語形を児玉郡から阻んでいるように見え、「ものもらい」は「メカゴ」「メケゴ」の類が児玉郡まで広がり、平野部の「メッパ」の語形と大里郡と児玉郡の境界で対峙している。同様に「(塩味が)うすい」も、平野部の「アマイ」という語形の分布が大里郡までで、児玉郡から切れて「ミズッポイ」という語形が分布する。この境界の間には自然地形の障害等はない。

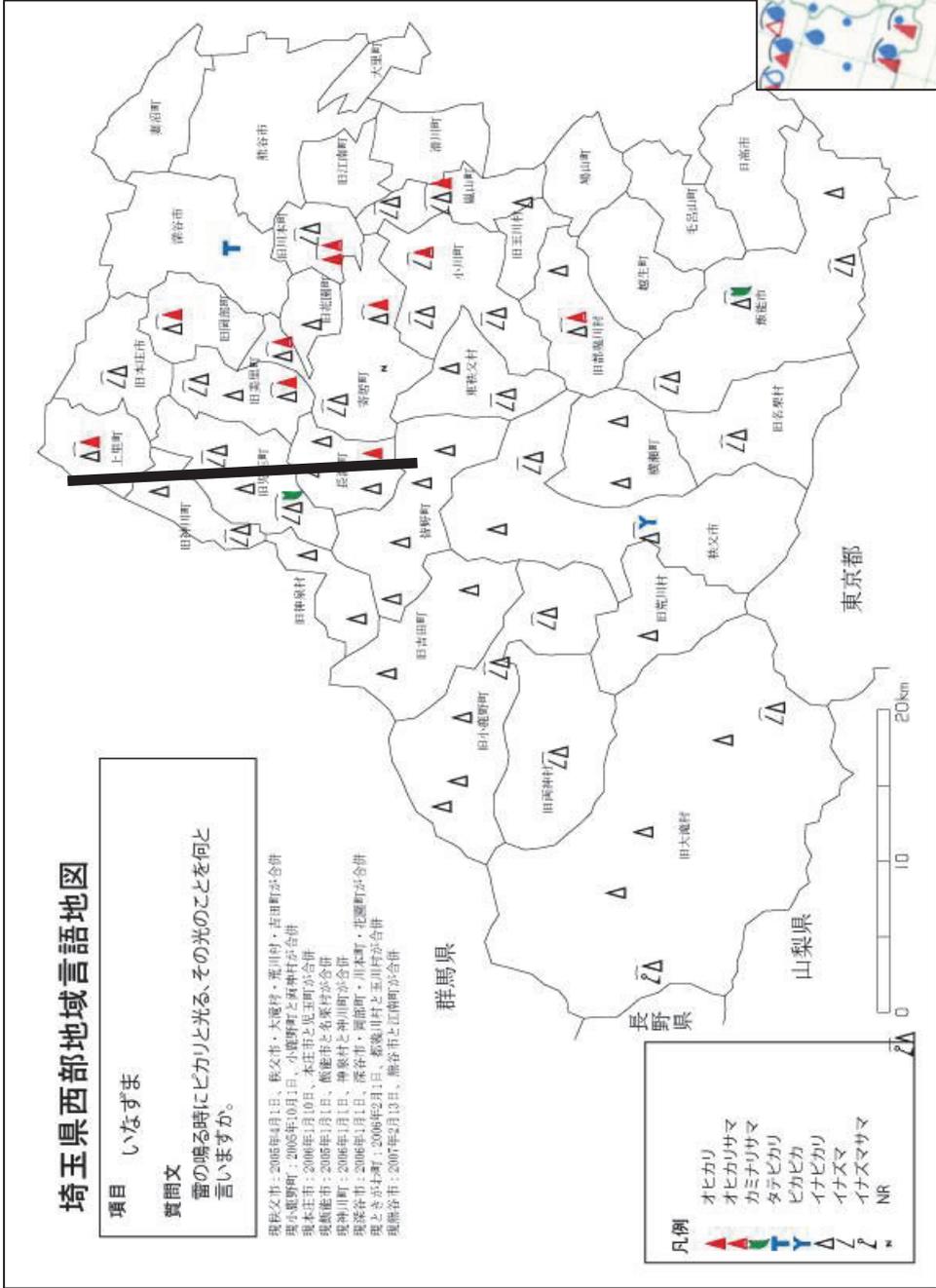


図 12 「稲妻」

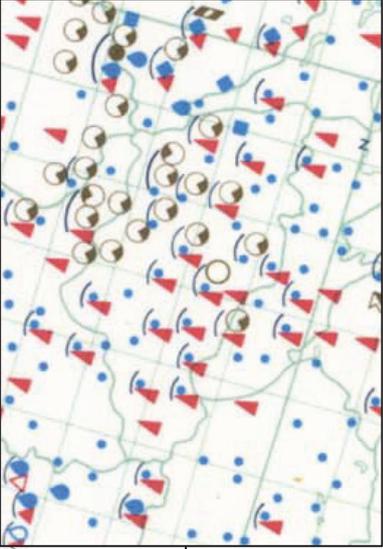


図 13 LAJ 258 図より「稲妻」

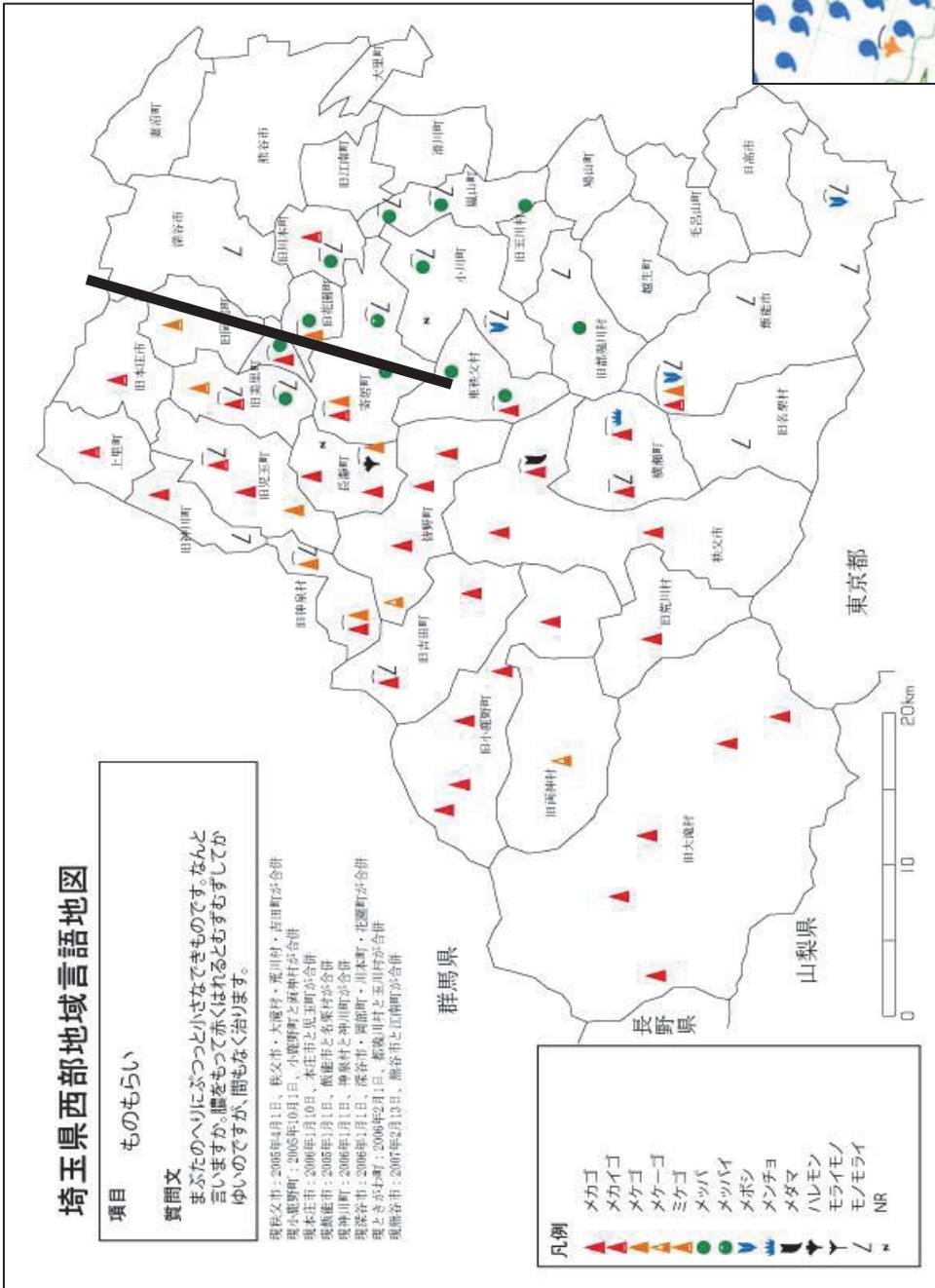


図 14 「ものもらい」

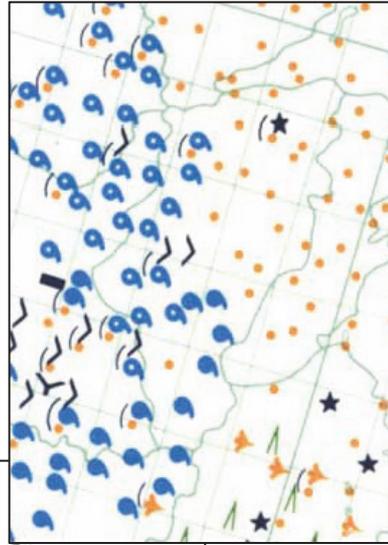


図 15 LAJ 112 図より「ものもらい」

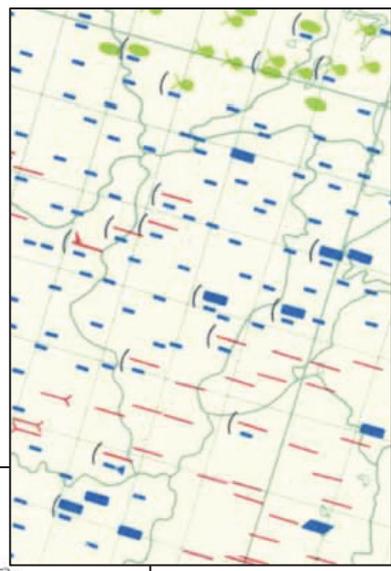
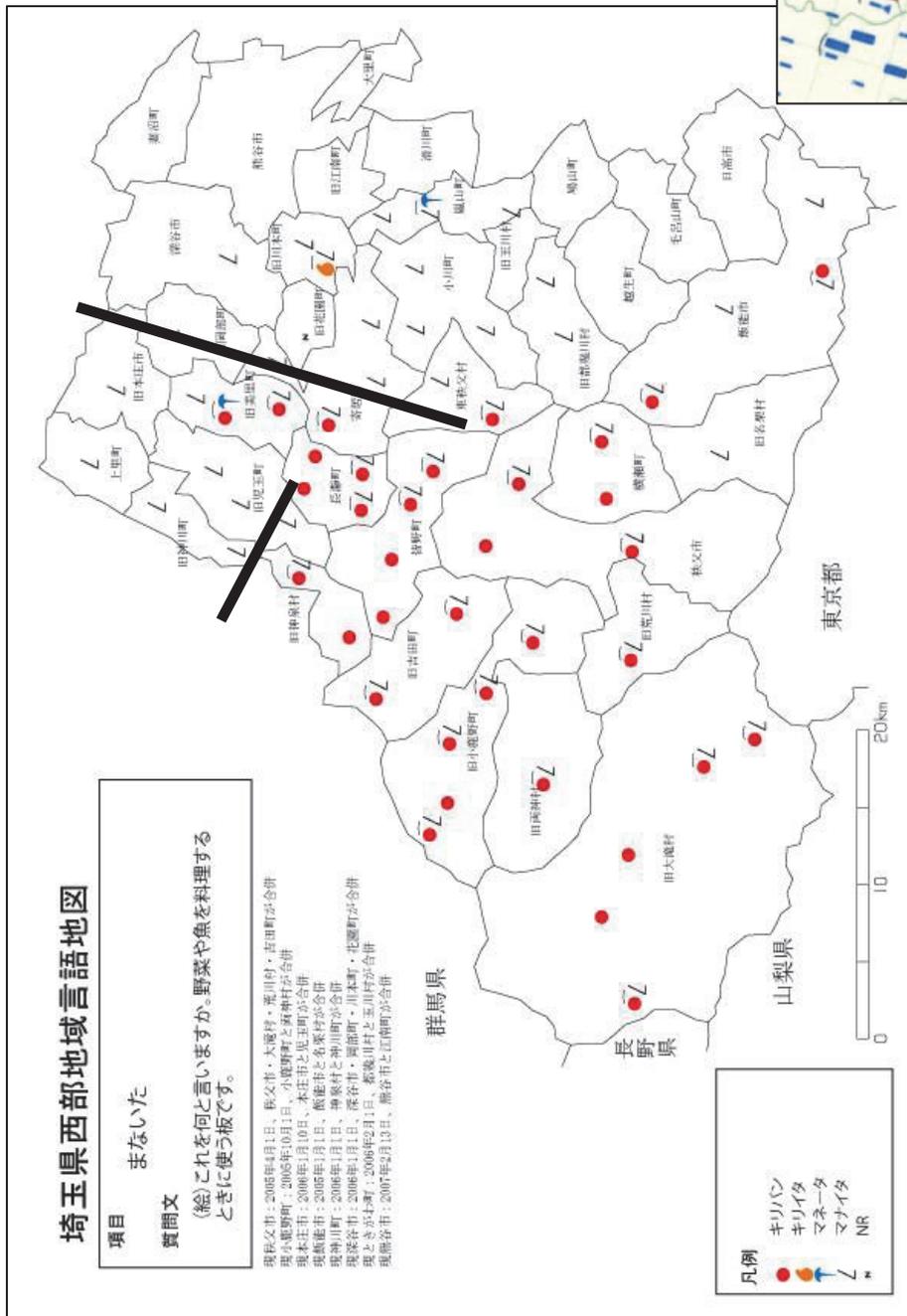


図 16 「まな板」

図 17 LAJ 164図より「まな板」

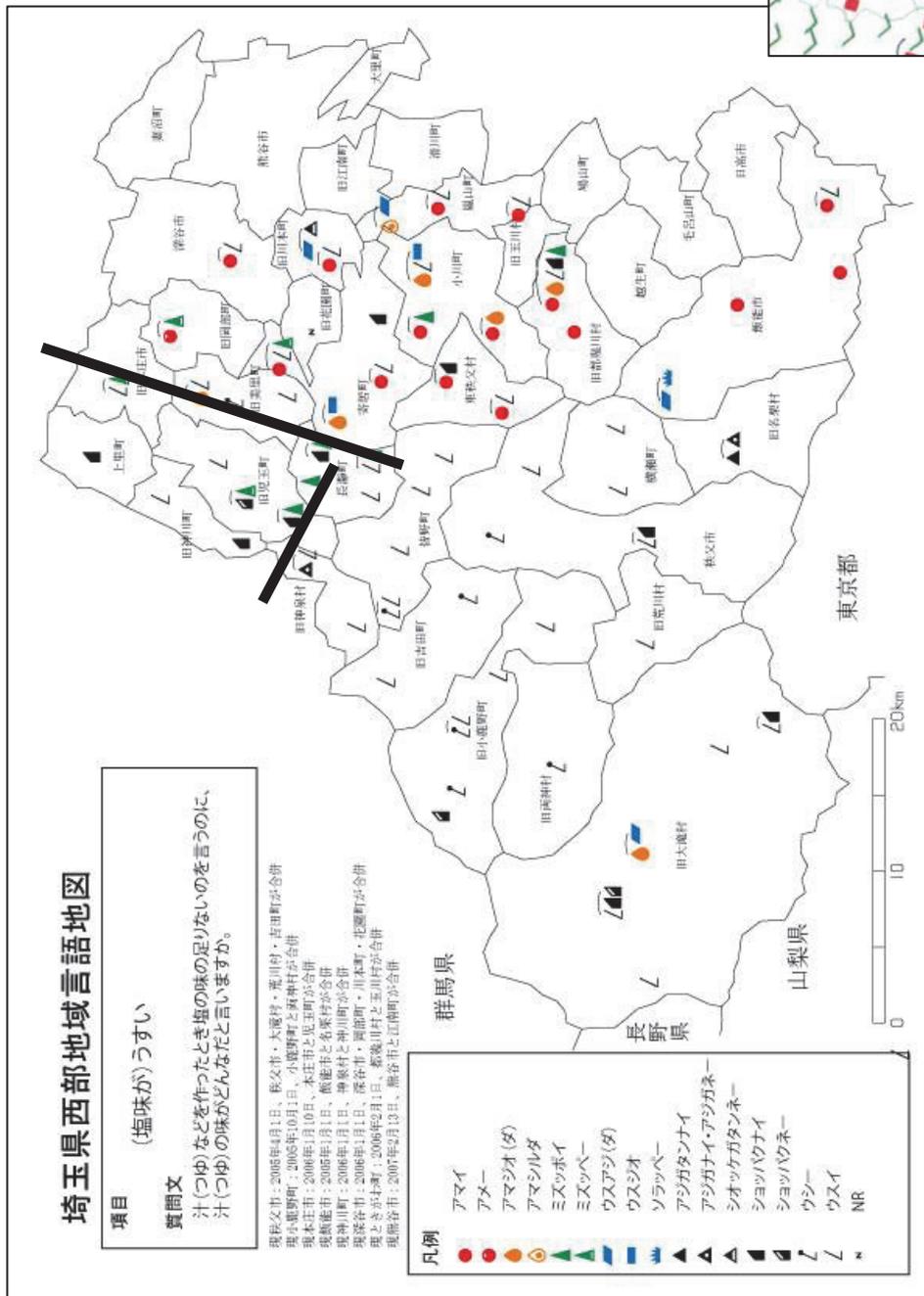


図 18 「(塩味が)うすい」

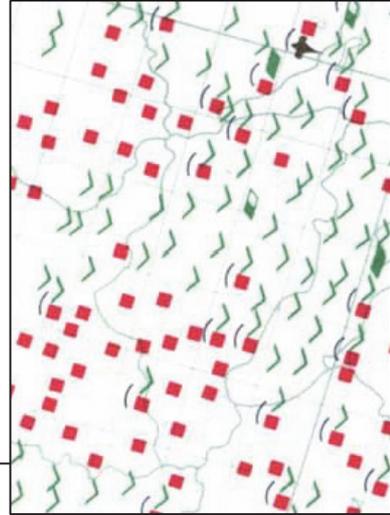


図 19 LAJ 38 図より「(塩味が)うすい」



#### 4. 3 文法項目の地図 「～サレル」の分布

次に可能を表す助動詞「～サレル」についての分布について述べる。「～サレル」を可能の意味で使用する地域があることは井上（1984）で既に指摘されている。ただ、その地域が井上（1984）では「三郷市では来サレル，来サエルを用いる」としており，県の南東端の三郷市にのみ聞かれるとされていた。しかし，もっと使用範囲は広いようである。すでに『GAJ』を見ると，図23と図25に引用したように，三郷市以外にも蓮田市で使用が認められる。本稿の図22・24の地図からは，蓮田市よりもさらに西寄りの地域，県中南部に「キサレル」「キサレネー」があることが確認される。受身の「来られる」も『GAJ』では三郷市に「キサエル」が見られるのみだが，本稿の図26では入間郡にも「キサレル」が散在している。ただ，この語形は秩父郡までは分布が及ばず，およそ比企郡や入間郡にとどまる広がりをもっているようである。

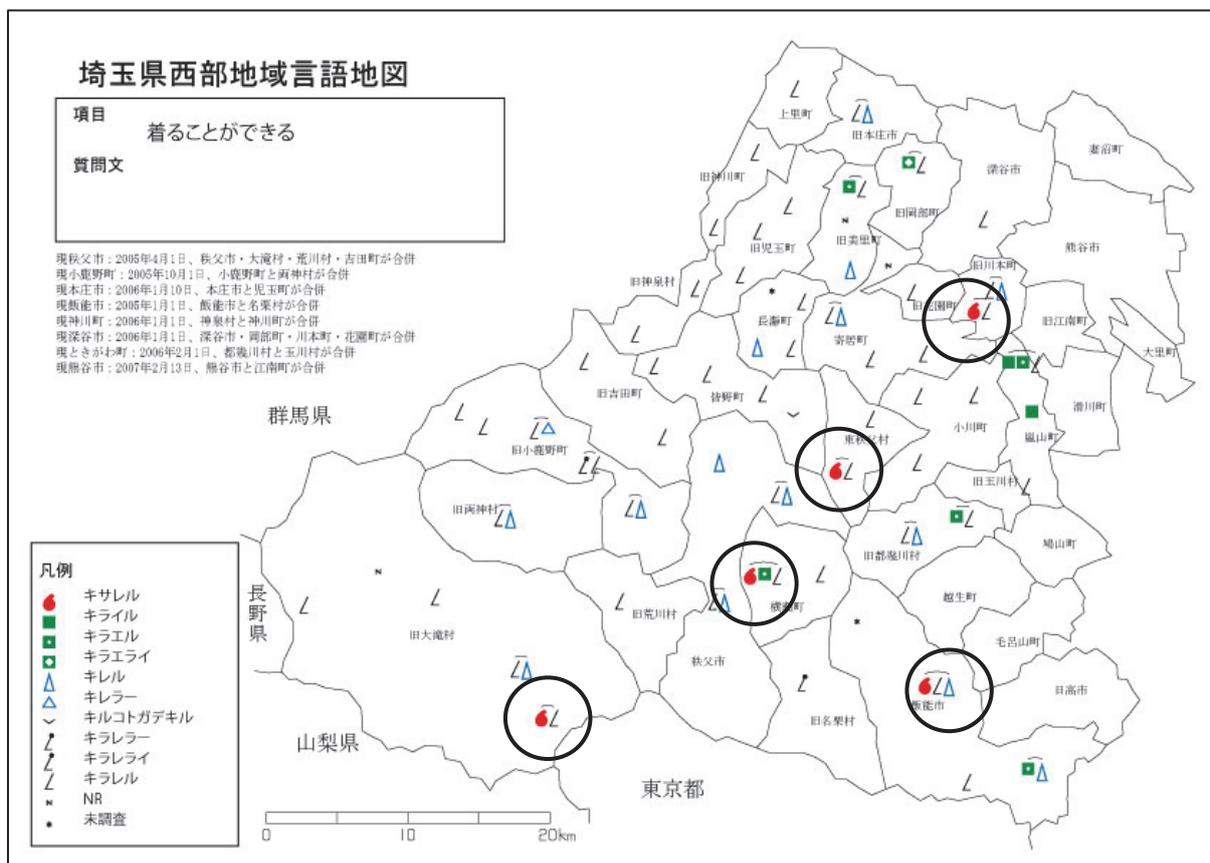


図 22 「着ることができる」



図 23 GAJ 175 図より「着ることができる」

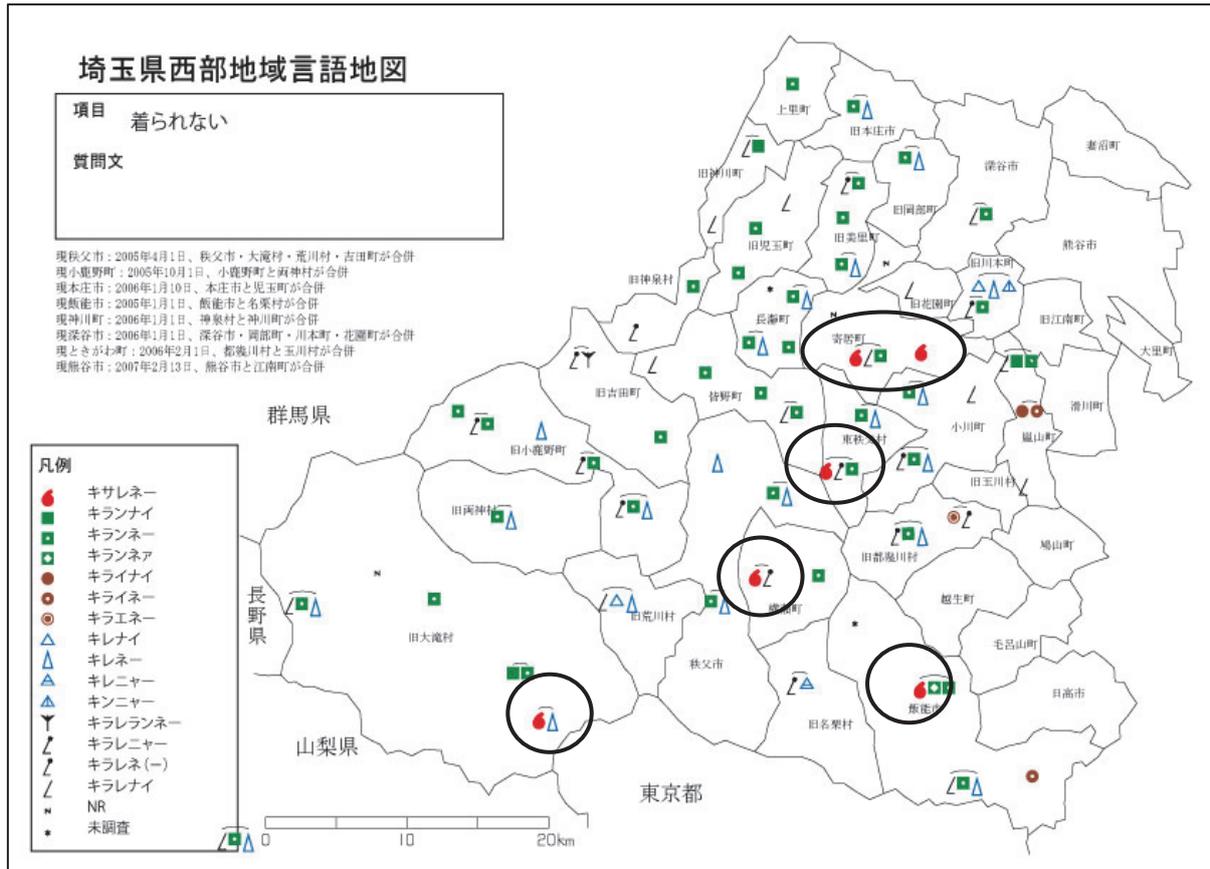


図 24 「着られない」

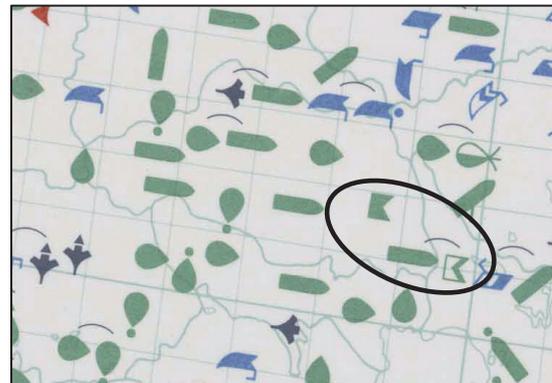


図 25GAJ184 図より「着ることができない」

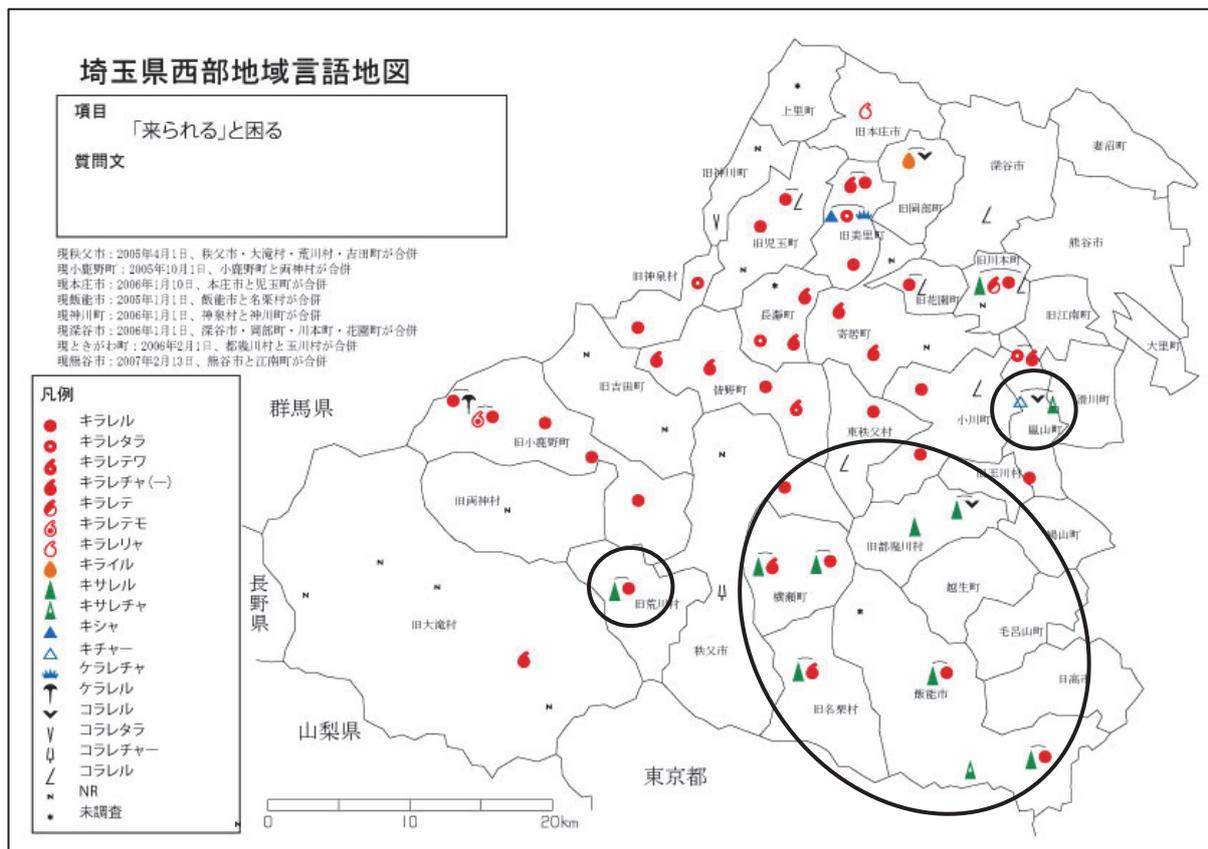


図 26 「来られる」(受身)

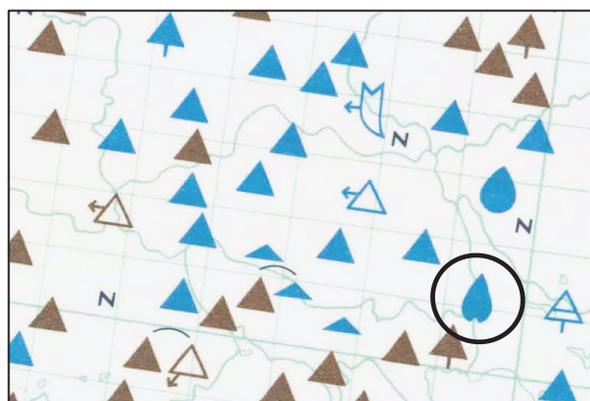


図 27 GAJ 116 図より「来られると」(受身)

## 5. まとめ

以上、まとめると、埼玉県の「秩父方言」(西部方言)の分布領域は、語彙においてかなり明確な境界線が見いだせる。まず「秩父方言」の東端は東秩父村を除く秩父郡の領域が当てはまる。東秩父村は行政区画上の秩父郡だが方言的には分かれて県中部方言に属する。「秩父方言」の北西部の境界は、児玉郡神川町にあり、これより以南が「秩父方言」に属する。ただ語彙によってはそれ以外の児玉郡の市町まで秩父と同じ語形であることもある。境界をおよそ地図上に書き込むと図 28 のようになる。実線以西は「秩父方言」と言うて良いが、破線部を境界にする語もある。この実線と破線に囲まれた児玉郡の上里町・本庄市・美里町は「秩父方言」か「北部方言」



図 28 「秩父方言」(西部方言)の境界

か、両方の要素をもっていることになる。これについてはもっと詳しく見る必要がある。いずれにせよ、方言の境界は自然地理的な要素によって作られている面が大きいようで、秩父山麓の地域がおおよそ「秩父方言」と見られる。

また、助動詞「～サレル」(受身・可能)が『GAJ』で報告されているよりも、さらに秩父郡のすぐ東端まで広い分布を示す可能性があることが分かった。この助動詞は県南部の特徴といえる可能性がでてきた。県南東部の三郷市や蓮田市から県中南部の入間郡まで連続分布していた可能性がある。現在は、未調査の県中央部にあるさいたま市など、東京の影響が強い地域で、この分布の連続が分断されているかもしれない。今後も調査は継続していく予定であるので、県中部の調査が終わり東部の分布と繋がれば、この点も明らかにしていくことができよう。

## 文献

- 井上史雄 (1984) 「7 埼玉県の方言」『講座方言学 5 - 関東地方の方言 -』国書刊行会, 171-202.  
 大橋勝男 (1974・1976) 『関東地方域方言事象分布地図』第二巻・第三巻 (桜楓社)  
 大橋勝男 (1990・1991) 『関東地方域の方言についての方言地理学的研究』第二巻・第三巻 (桜楓社)  
 亀田裕見 (2010a) 「埼玉県東部地方の方言分布と世代差(1) 語彙の分布」『文教大学文学部紀要』23(2), 1-59.

- 亀田裕見 (2010b) 「埼玉県東部地方の方言分布と世代差(2) 文法事象の分布」『文教大学文学部紀要』24(1), 37-87.
- 国立国語研究所 (1966-1975) 『日本言語地図』第1～6集 (国立国語研究所報告 30(1)-30(6))  
大蔵省印刷局
- 国立国語研究所 (1989-2006) 『方言文法全国地図』第1～6集 (国立国語研究所報告  
97-1, 2, 3, 4, 5, 6) 大蔵省印刷局 (第1～4集) 財務省印刷局 (第5集) 国立印刷局 (第  
6集)
- 柴田武 (1984) 「埼玉県南部・東京都北部の方言分布(1)」『人口急増地帯としての埼玉県における言語接触とその問題点に関する総合的研究 昭和58年度文部省科学研究費補助金による県境成果報告』
- 東条操(1937) 「埼玉県の方言区画」『方言』7-2, 1-4.
- 東条操(1937) 「秩父地方の方言調査より」『方言』7-2, 5-18.
- 東京外語大学日本語ゼミナール(1978) 『東京外語大秩父地方方言地図』
- 鶴田秀樹 (1986) 『埼玉県秩父地方における言語地理学的研究』本文編・地図編  
東京外国語大学日本語ゼミナール (1978) 『秩父地方方言地図』